楚遊日記（1）

●崇禎一〇（一六三七）年正月十一日～三十日、二〇日間　徐霞客五十二歳

●訳注稿

第二部　遊衡山日記（一月二十一日～二十八日）

［一月二十一日］

《概要》早朝、楊子坪から舟航。雷家埠を経て、湘江に入る。湘江を下り、衡山県城に着き、上陸。陸行。師姑橋を経て、（南岳区に入り）司馬橋をわたって、南岳廟に着く。南嶽登山は後回しとし、東側の水簾洞探索に出かける。水簾洞探索。次いで九真洞探索を試みたが、時間切れで南岳廟に引き返して泊。地元民によれば、九真洞の「洞」とは「洞穴」ではなく、山に囲まれた盆地のことだということだった。

■本文の部

二十一日

四鼓、月明、舟人即促下舟。二十里、至雷家埠、出湘江、雞始鳴。又東北順流十五里、抵衡山縣。江流在縣東城下。自南門入、過縣前、出西門。三里、越桐木嶺、始有大松立路側。又二里、石陂橋、始夾路有松。又五里、過九龍泉、有頭巾石。又五里師姑橋、山隴始開、始見祝融北峙、然夾路之松、至師姑橋而盡矣。橋下之水東南去。又五里入山、復得松。又五里、路北有「子抱母松」［大者二抱、小者分兩岐］。又二里、越佛子坳、又二里、上俯頭嶺、又一里則岳市矣。過司馬橋、入謁岳廟、出飯於廟前。問水簾洞在山東北隅、非登山之道；時纔下午、猶及登頂、密雲無翳、恐明日陰晴未卜。躊躇久之、念既上豈能復迂道而轉、遂東出岳市、即由路亭北依山轉岐。初、路甚大、乃湘潭入岳之道也。東北三里、有小溪自岳東高峯來、遇樵者引入小徑。三里、上山峽、望見水簾布石崖下。二里、造其處、乃瀑之瀉於崖間者、可謂之「水簾」、不可謂之「洞」也。崖北石上大書「朱陵大瀝洞天」、並「水簾洞高山流水」諸字、皆宋元人所書、不辨其人款。引者又言、其東九眞洞、亦山峽間出峽之瀑也。下山又東北二里、登山循峽、逾一隘、中峯廻水繞、引者以爲九眞矣。有焚山者至。曰：「此壽寧宮故址、乃九眞下流。所云洞者、乃山環成塢、與此無異也、其地在紫蓋峯之下。逾山而北尚有洞、亦山塢、〔漸近湘潭境。〕予見日將暮、遂出山、十里、〕僧寮已近、還宿廟。

■訳注の部

●訓訳

二十一日

四鼓、月明かなり。舟人即ち促して舟に下らしむ。

二十里にして、雷家埠に至る。湘江に出づ。雞始めて鳴く。又た東北に流れに順ひて五

里にして、衡山縣に抵る。江の流れは縣の東城の下に在り。
南門より入り、縣の前を過ぎ、西門より出づ。
三里にして、桐木嶺を越ゆ。始めて大松の路側に立つ有り。又た二里にして、石陂橋たり。始めて路を夾みて松有り。又た五里にして、九龍泉を過ぐ。頭巾石有り。又た五里にして師姑橋たり。山隴始めて開け、始めて祝融の北峙するを見る。然れども路を夾むの松は、師姑橋に至りて盡けり。橋下の水は東南に去る。
又た五里にして山に入り、復た松を得。又た五里にして、路の北に「子抱母松」有り。「大なる者は二抱、小なる者は兩岐に分かる」。又た二里にして、佛子坳を越ゆ。又た二里にして、俯頭嶺を上る。又た一里なれば則ち岳市なり。
司馬橋を過ぎ、岳廟に入り謁す。出でて廟前に飯す。問ふに、水簾洞は山の東北隅に在りて、登山の道に非ずと。時に纔に下午にして、猶ほ頂に登るに及ぶがごとし。密雲あるも翳る無く、明日の陰晴未だ卜せざるを恐る。躊躇すること之を久しくす。念ふに既に上れば、豈に能く復た道をして轉ぜん、と。遂に東のかた岳市を出で、即ち路の亭の北より山に依りて岐に轉ず。
初め、路甚だ大なり。乃ち湘潭より岳に入るの道なり。東北に三里にして、小溪の岳東の高峯より來る有り。樵者に遇す。引きて小徑に入らしむ。三里にして、山峽を上る。水簾の石崖の下に布するを望見す。二里にして、其の處に造る。乃ち瀑の崖の間に瀉する者にして、之を「水簾」と謂ふべきも、之を「洞」と謂ふべからざるなり。崖の北の石上に「朱陵大瀝洞天」並びに「水簾洞高山流水」の諸字を大書す。皆な宋元人の書す所なるも、其の人の款を辨ぜず。
引者又た言ふ、其の東に九眞洞あり、亦た山峽の間にて峽を出づるの瀑なり、と。山を下り又た東北に二里にして、山を登り峽に循ひ、一隘を踰ゆれば、中は峯廻り水繞る。引者以って九眞となす。山を焚する者の至る有り。曰く「此れ壽寧宮の故址なり、乃ち九眞の下流なり。云ふ所の洞なる者は、乃ち山環りて塢を成すにして、此と異なる無きなり。其の地は紫蓋峯の下に在り。山を逾えて北に尚ほ洞有り、亦た山塢あり、漸く湘潭の境に近きなり」と。予日の將に暮れんとするを見、遂に山を出づ。十里にして、僧寮已に近し、還りて廟に宿す。

●語注

○四鼓　四更。午前一時半から三時半くらい。
○雷家埠　黄珅は、今の「雷溪」といい、譚民政は、いまの新塘鎮雷新村がここでは、という（八四頁）。大小地図では洙水と湘江との合流地点の地名を記さないが、新塘鎮の地名は、合流地点よりも北の、衡山県の対岸やや南に記す。「衡山県」図、十「高山縣」図では、合流地点付近に「雷溪市」が見える。
○衡山県城　今の衡陽市衡山県開雲鎮。湘江沿いにあって、衡山登山の入口にあたる。
○桐木嶺　黄珅は、また桐崗といい、「桐崗帰牧」は衡山八景の一だと注す。
○九龍泉　黄珅は、泉眼が多くあるので、この名を得たと注す。十「衡山県」図、「衡山県」図に「九龍泉」が、大地図・小地図②に「九龍」が見える。
○師姑橋　黄珅は、今の師古橋で、旁らに師姑塔があるので、この名を得たと注す。「地名湖南」、各地図に見える。

○祝融　祝融峯。南岳衡山の主峯。海抜一二九八㍍。
○岳市　南岳市。今の南岳区。南岳の麓のまち。
○司馬橋　黄珅は、龍隠河の上流に架かる橋で、明の司馬であった劉堯誨が建てたのでこの名があると注す。
○水簾洞　黄珅は、南岳廟の北八里、紫蓋峯の下にあり、旧名は朱陵祠、道教の第三洞天であると注す。杜光庭『洞天福地岳瀆名山記』には、三十六洞天（小洞天）の三番目に「衡山、朱陵洞天、七百里、在衡州衡山県」とある。「南嶽志」巻五形勝に「〔朱陵洞〕在紫蓋峯……洞有飛泉掛壁、是爲水簾洞」などとある。「南岳市」図に見える。
○既上豈能復迂道而轉　徐霞客が今いる南岳太廟は南岳市から登ったところにあるが、祝融峯と水簾洞とに向かう分かれ道にあたる。まず祝融峯へ行くとそのあと水簾洞へ行くためには南岳太廟まで引き返す必要がある。このことを言っているのであろう。実際に徐霞客は、水簾洞訪問を先にし、そののち祝融峯へ登り、南岳太廟へ引き返すことなく、そのまま西に南岳を下っている。
○湘潭　長沙府の県で、衡山県の北五〇㌔ばかりに位置する。そこから南へ衡山県に至る道の分かれ道のひとつが今の水簾洞中学校を通って南岳太廟に至る。
○九眞洞　「南嶽志」巻五形勝に「〔九眞洞〕在碧岫峯」とある。
○壽寧宮　「南嶽志」巻二十寺観に「〔九眞観〕在嶽廟左、即壽寧観故址。〔明一統志〕観在衡山仙巖峯。……蓋朱陵洞天之霊墟也」とある。

●口語訳

［二十一日］

《15》衡山県城へ：舟航

ときは四更、月が明るく出ている。船頭がすぐに促して乗客を乗船させた。

二十里で、雷家埠に至る。ここで湘江に出る。雞が始めて鳴く。さらに東北へ、流れに順って五里進み、衡山県城に至る。湘江の流れは、衡山県城の東の城壁の下に至る（そこで上陸する）。

《16》衡山県城から南岳廟へ

県城の南門から入城し、県の役所の前を通り過ぎ、そのまま西門から城外へ出た。

三里進み、桐木嶺を越える。ここで始めて、路の側に大きな松の木が立っている。さらに二里で、石陂橋である。ここで始めて路の両側に松林が続く。さらに五里で、九龍泉を過ぎる。ここには頭巾石がある。さらに五里で師姑橋である。山が始めて開け、祝融峯が北に聳えているのが初めて見えた。しかし、路の両側にあった松林は、師姑橋に至って無くなった。橋下を流れる小川は、東南の方角へ流れ去っている。

さらに五里で山に入る。ここで再び松林に入る。さらに五里で、路の北に「子抱母松」がある［自注1］。さらに二里で、仏子坳を越える。さらに二里で、俯頭嶺を上る。さらに一里行くと、南岳市である。

《17》水簾洞探訪

司馬橋を渡り、南岳廟に入って拝謁する。廟を出て廟前で食事にする。

（地元の者に）水簾洞について質問したところ、「水簾洞は山の東北隅にあって、祝融峯に登るメインルートの上にはない」ということであった。時に午後になったばかりで、

祝融峯に登る時間はあるようだった。現在雲がかかってはいるが、それほど陰ってはおらず、明日晴れるかどうか分からない状態で、本日頂上に登るのか、明日にするのかで、しばらく迷っていた。

しかし、ここまで登ってきたからには道を転じるのももったいないと思い、水簾洞を優先することとした。遂に岳市を東に出て、路端の亭の北側を通って、山なりに分かれ道に入って行く。

初めのころ、路は甚だ広かった。この道は湘潭から南岳へ入る道だである（だから割合と大きい）。東北に三里進むと、南岳東部の高峯から流れてくる小さな渓流がある。樵者に行き会ったので案内を頼む。彼は我々を小徑に引き入れた。三里進み、山峽を上る。水の簾が石崖の下に広がっているのが見えた。二里で、その場所に至った。こここそ瀑布が崖の間に注いでいるものであるが、「水簾」とは言えても、「洞」と言えるものではなかった。崖の北の石上に「朱陵大瀝洞天」及び「水簾洞高山流水」の文字が大書されている。それらは皆な宋元人が書したものだろうが、落款は摩滅しており誰のものかは弁別できなかった。

《18》九真洞探訪を断念

案内の者がさらに言う「この東に九真洞がある。これもまた山峽の間にあって、峡谷から出ている瀑布である」と。

山を下り、さらに東北に二里進み、山を登り山峽に沿って、狭隘な出口を越えると、その中は山峯が周りを囲み、水が廻っているところだった。案内人は、ここが九真だという。

たまたま山焼きをしているものがやってきて次のように言った、

「これは寿寧宮の址である。九真洞の下流にあたる。そもそもここでいう“洞”というのは、山が周囲を囲っていて窪地を成しているものをいい、その点で、九真洞はこの場所と似ている。そこは紫蓋峯の下にあたる。山を越えて北に行くと別の洞があり、また窪地がある。ほとんど湘潭との境に近い」と。

もう日が暮れようとしているので、私は（九真洞を探索するのはあきらめて）山を出ることにした。十里進むと、僧房が近くに見えた。そこで引き返して南嶽廟に宿した。

［自注1］大きい方は二抱えの太さがあり、小さい方は先がふたつに分かれている。

［一月二十二日］

《概要》南岳衡山への登攀活動。南岳廟から祝融峯まで。

「上海新整理本」の底本である「季本」は、わずか一文のみ。乾隆本には詳細な記事がある。乾隆本を訳すが、登山途中の寺院や名勝などの位置関係について、乾隆本の記載は、現在確認できるものと異なるものがある。

＊「乾隆本」：「南岳廟→鉄仏寺→丹霞寺→宝善堂→半山菴→湘南寺→南天門→上封寺」

＊小地図②附載「南岳衡山風景名勝区」図：「南岳廟→玉板橋→半山亭→丹霞寺→鉄仏寺→湘南寺→南天門→上封寺」

「南嶽志」の記事や「南嶽市」図の記載も、現在の位置関係の方が符号する。この点で言えば、南岳衡山への登山に関しては、乾隆本徐霞客游記は、記事の信頼性に問題がある

と言わざるを得ない。

■本文の部

二十二日

十五里、半山庵。五里、南天門。

〔力疾登山。由岳廟西度將軍橋、岳廟東西皆澗。北入山一里、爲紫雲洞、亦無洞、山前一崗當戸環成耳。由此上嶺一里、大石後度一脊、里許、路南有鐵佛寺。寺後躋級一里、路兩旁俱細竹蒙茸。上嶺、得丹霞寺。復從寺側北上、由絡絲潭北下一嶺、又循絡絲上流之澗一里、爲寶善堂。其處澗從東西兩壑來、堂前有大石如劈、西澗環石下、出玉板橋、與東澗合而南。寶善界兩澗中、去岳廟已五里。堂後復躡蹬一里、又循西澗嶺東平行二里、爲半雲菴。菴後渡澗西、躡級直上二里、上一峯、爲茶菴。又直上三里、逾一峯、得半山菴、路甚峻。由半山菴丹霞側北上、竹樹交映、青翠滴衣。竹中聞泉聲淙淙。自半雲逾澗、全不與水遇、以爲山高無水、至是聞之殊快。時欲登頂、過諸寺俱不入。由丹霞上三里、爲湘南寺、又二里、南天門。〕平行東向二里、分路。南一里、飛來船・講經臺。轉至舊路、又東下半里、北度脊、西北上三里、上封寺。上封東有虎跑泉、西有卓錫泉。

■訳注の部

●訓訳

二十二日

十五里にして、半山庵たり。五里にして、南天門たり。

〔乾隆本〕

力疾に山を登る。岳廟の西より將軍橋を度る。岳廟の東西は皆な澗なり。北のかた山に入ること一里にして、紫雲洞たり。亦た洞無く、山前の一崗の戸に當りて環成するのみ。此より嶺を上ること一里にして、大石の後ろにて一脊を度る。里許りにして、路の南に鐵佛寺有り。寺の後ろ級を躋むこと一里、路の兩旁は俱に細竹蒙茸たり。嶺に上りて、丹霞寺を得。復た寺の側より北に上る。絡絲潭の北より一嶺を下る。又た絡絲の上流の澗に循ふこと一里にして、寶善堂たり。其の處の澗は東西兩壑より來る。堂前に大石の劈するが如き有り。西の澗は石下を環り、玉板橋に出で、東澗と合して南す。寶善は兩澗の中に界し、岳廟を去ること已に五里なり。堂の後ろにて復た蹬を躡むこと一里にして、又た西澗の嶺の東に循ひ、平行すること二里にして、半雲菴たり。菴の後ろより澗を度り、西に級を躡みて直ちに上ること二里、一峯を上れば、茶菴たり。又た直ちに上ること三里にして、一峯を踰えて、半山菴を得。路甚だ峻なり。半山菴の丹霞側より北に上る。竹樹交々映え、青翠衣を滴たらせる。竹中に泉聲の淙淙たるを聞く。半雲より澗を逾ゆるまで、全く水と遇はず。以爲らく山高くして水無し、と。是に至りて之を聞き殊に快なり。時に頂に登らんと欲し、諸寺を過ぐるも俱に入らず。丹霞より上ること三里にして、湘南寺たり。又た二里にして、南天門なり。平行して東に向ふこと二里なるもの、路を分つ。南に一里にして、飛來船・講經臺なり。轉じて舊路に至り、又た東に下ること半里、北のかた脊を度り、西北に上ること三里にして、上封寺たり。上封の東に虎跑泉有り、西に卓錫泉有り。

●語注

○半山庵　「南嶽志」巻十九寺観に「〔半山庵〕在祝高嶺鐵佛庵下」とある。今の半山亭。南岳廟と祝融峯の中間にあたる。「南岳市」図に見える。
○南天門　祝融峯の入口にあたる。「白果市」図に見える。以上の二文は、李介立本で、「力疾」以下が乾隆本。内容は重複している。
○力疾　動作が力強く迅速なさま。
○鐵佛寺　「南嶽志」巻十九寺観に「〔鐵仏菴〕在祝高嶺庵。内有鐵佛」とある。
○蒙茸　乱れるさま。
○丹霞寺　「南嶽志」巻十九寺観に「〔丹霞寺〕在南天門下。唐智通禅師天然嘗住此」とある。
○絡絲潭　「南嶽志」巻五形勝に「〔絡絲潭〕在廟後。納寿澗水匯而爲潭」とある。
○玉板橋　「南嶽志」巻五形勝に「〔玉版橋〕在玉版溪上」とある。「南岳市」図に見える。
○湘南寺　「南嶽志」巻十九寺観には「〔湘南寺〕在嶽廟東」とあり、麓の南岳廟付近にあるとする。しかし、現在同名の寺院は、南嶽中の鉄仏寺と南天門の間にある。
○飛來船　黄珅は、「南天門の東にある船の形に似ている石で、空から飛んできてここに刺さったかのようなので、この名がある」と注す。
○講經臺　黄珅は、「擲鉢峯にあり、方形の石で上に“天子萬年”が刻されている」と注す。
○上封寺　「南嶽志」巻十九寺観に「〔上封寺〕在祝融峯」とあり、多くの記事を載せる。「白果市」図に見える。
○虎跑泉　「南嶽志」巻五形勝に「〔虎跑泉〕舊志在祝融峯頂通志在福厳寺」とある。
○卓錫泉　「南嶽志」巻五形勝に「〔卓錫泉〕在擲鉢峯下福厳寺」とある。

●口語訳

二十二日

《19》南岳登山、上封寺まで

南岳廟から十五里で、半山庵である。ここから五里で、南天門である。

〔乾隆本〕

力をこめ迅速に山を登る。南岳廟の西側で将軍橋を渡る。南岳廟の東西はどちらも渓流が流れる。北の方へ山に入り、一里で紫雲洞である。ここも洞穴は無く、山並みがぐるっと囲っていてひとつのエリアを形成しているものだ。ここから嶺を一里上り、大石の後ろを通って山筋をひとつ越える。一里許りで、路の南に鉄仏寺がある。その寺の後ろから石段を登ること一里。この間路の両側は細竹が乱れ生えている。嶺に上ると、丹霞寺である。さらに丹霞寺の側から北に上り、絡絲潭の北から嶺をひとつ下る。さらに絡絲潭の上流の澗に沿って一里進むと、宝善堂である。この場所は、東西の谷から渓流が流れてきている。宝善堂の前に断ち斬ったような大石がある。西から流れてきた渓流は、この大石の下をめぐり、玉板橋をくぐって、東から流れてきた渓流と合流し、南へ流れる。宝善堂はふたつの渓流の真ん中にあって、南岳廟からはもはや五里の距離である。

宝善堂の後ろから再び石段を一里上り、さらに西から来た渓流に沿った東側の嶺に沿って、平行して二里進むと、半雲菴である。菴の後ろから渓流を渡り、西の方角に石段を踏

みながら真っ直ぐ上ること二里で、一峯を上れば、茶菴である。ここからさらに真っ直ぐ三里上り、一峯を踰えると半山菴である。この間、路は極めて険峻であった。半山菴の丹霞寺側から北に上る。竹と樹木がこもごも映えており、青や翠が衣に滴っているかのようである。竹藪の間からさらさらとした水音が聞こえる。半雲菴からこの渓流を越えるまで、まったく水流とはであわなかった。山が高いので水が無いのだなと思っていた。ところがここに至って水音を聞くことになり、とても快適な思いをした。

この時は、とにかく頂上に登ろうと思っていたので、寺院を多く通過したが、中に入って訪ねることはしなかった。丹霞寺から三里上ると、湘南寺である。さらに二里で、南天門に着いた。平行して東に向う二里の道がある。南に一里で、飛来船・講経台である。そこを訪ねた後、引き返して元の道に至り、さらに東に半里下り、さらに北へ尾根を渡り、西北に三里上ると、上封寺である。上封寺の東に虎跑泉があり、西に卓錫泉がある。

［一月二十三日～二十五日］

《概要》この三日間については、「上封寺」という記載しか無い。二十六日条に「再上祝融會仙橋」とあれば、この三日間は上封寺を根拠地として、祝融峯など衡山山頂付近を探索したのであろう。ただし残念ながら日記が残っていない。あるいは、西南部から登頂し、山頂付近を遊行する記録はいくらでも残っていることから、徐霞客はあえて「書かなかった」のかもしれない。

■本文の部

二十三日
上封。

二十四日
上封。

二十五日
上封。

■訳注の部

●口語訳

《20》上封寺滞在

二十三日
上封。

二十四日
上封。

二十五日
上封。

［一月二十六日］
《概要》上封寺から山頂めぐり。メインルートである登頂道ではなく、西回りの道を取り、天柱峯から下り、福厳寺泊。

■本文の部

二十六日
晴。至觀音崖、再上祝融會仙橋、由不語崖西下。八里、分路。［南茅坪。］北二里、九龍坪、仍轉路口。南一里、茅坪。東南由山半行、四里渡亂澗、至大坪分路。［東南上南天門。］西南小路直上四里、爲老龍池、有水一池在嶺坳、不甚澄、其淨室多在嶺外。西南側刀之西、雷祖之東分路。東二里、上側刀峯。平行頂上二里、下山頂、度脊甚狹。行赤帝峯北一里、繞其東、分路。乃南由坳中東行、一里、轉出天柱東、遂南下。五里、過獅子山與大路合、遂由岐路西入福嚴寺。［殿已傾、僧佛鼎謀新之。］宿明道山房。

■訳注の部

●訓訳

二十六日
晴。觀音崖に至り、再び祝融會仙橋に上る。不語崖より西に下る。八里にして、路分かる［南は茅坪なり。］。北に二里にして、九龍坪なり。仍りて路口に轉ず。南に一里にして、茅坪なり。東南に山半によりて行き、四里にして亂澗を渡り、大坪の分路に至る。［東南すれば南天門に上る。］西南の小路より直ちに上ること四里にして、老龍池たり。水一池の嶺坳に在る有り、甚しくは澄まず、其の淨室は多く嶺外に在り。西南は、側刀の西と雷祖の東の分路なり。東に二里にして、側刀峯に上る。頂上を平行すること二里にして、山頂を下り、脊の甚だ狹きを度る。赤帝峯の北を行き、一里にして、其の東を繞る、分路なり。乃ち南して坳中より東に行き、一里にして、轉じて天柱の東に出ず。遂に南に下り、五里にして、獅子山と大路との合するところを過ぐ。遂に岐路により西のかた福嚴寺に入る。［殿は已に傾く。僧佛鼎之を新たにせんことを謀る。］明道の山房に泊す。

●語注

○觀音崖　「南嶽志」巻五形勝六七裏に「〔觀音巖〕在碧蘿峯下、巖有念菴松」とある。黄珅は。念菴は、明代の学者羅洪先の号で、彼が常にこの巖で読書していたことにちなむ、と注す。碧蘿峯は、「南嶽志」巻五形勝四一表に「〔碧蘿峯〕即觀音巖、在祝融峯下」とある。

○會仙橋　「南嶽志」巻五形勝九八表に「〔會仙橋〕在祝融峯青玉壇。相傳、曾有神仙會此、故名」とある。青玉壇は、「南嶽志」巻五形勝八二表に「〔青玉壇〕在祝融峯。一石突出、下臨萬仞、上端平可坐數十人。壇上別有二石、絶不根連、若自天外飛来、如坐如踞」

とある。
○不語崖　「南嶽志」巻五形勝六九表に「〔不語巖〕在祝融峯後青玉壇下。昔有南臺寺僧。素不語、號不語禅師、常於此巖打座」とある。
○九龍坪　「南嶽志」巻五形勝八一裏に「〔九龍坪〕在祝融峯、後飛泉懸注、古木堅蒼、中有大禅林」とある。
○老龍池　「南嶽志」巻五形勝九五表に「〔老龍池〕在側刀峯右、池闊丈餘、長二丈餘、深不測。毎春蝦蟇來聚池中、至六七日乃去」とある。
○側刀峯　「南嶽志」巻五形勝四〇表に「〔剆㓝峯〕在嶽廟後、東有石室、世傳惠車子修行於此［剆㓝一作側刀］」とある。黄珅は、明代に蔵経閣が建てられたと注す。いまの
○雷祖　「南嶽志」巻五形勝四四裏に「〔雷祖峯〕當祝融之麓、峯有雷池、能興雲布雨、故名雷祖」とある。黄珅は、かつて黄帝がその妻の螺祖と南岳を巡遊し、ここで螺祖が死んだので葬り、螺祖峯と名づけた、のちに雷祖峯となまった、と、注す。
○赤帝峯　「南嶽志」巻五形勝三五裏に「〔赤帝峯〕在廟後。古名煉玉峯、上有惠車子尸解處」とある。黄珅は、赤帝（即炎帝神農）がここに葬られたことからの命名、と注す。「南岳市」図に見える。
○天柱　「南嶽志」巻五形勝三四表に「〔天柱峯〕在嶽廟西、兩峯端聳、其形似柱」とある。「南岳市」図に見える。
○獅子山　「南嶽志」巻五形勝三七表に「〔獅子峯〕在嶽廟後、下有靈源、時聞石間冷冷然而不見水」とある。黄珅は、またの名を獅子巖、天柱峯南麓にある、と注す。
○福嚴寺　「南嶽志」巻一九寺観二二表に「〔福嚴寺〕在擲鉢峯下、舊名般若臺。陳光大元年慧思禅師建」とある。
○明道山房　「南嶽志」巻一七書院一裏に「〔鄴侯書院〕亦明道山房、在煙霞峯下、唐李泌故宅也。名端居室」とある。煙霞峯は、「南嶽志」巻五形勝三六表に「〔煙霞峯〕在嶽廟後、下有懶残巖、李泌故居」とある。

●口語訳

二十六日

《21》祝融峯めぐり、西から下り福厳寺へ

晴れ。

観音崖に至り、再び祝融会仙橋に上る。不語崖から西に下る。八里で、分岐点である［自注1］。北への道を選び、二里進むと九龍坪である。ここで分岐点に引き返す。南に一里で、茅坪である。東南方向へ山の中腹を進み、四里でかき乱れた渓流を渡り、大坪の分岐点に至る［自注2］。西南の小路を選び、真っ直ぐ上ること四里で、老龍池である。山の窪地にある池で、それほど澄んではいない。僧侶達の居室は、多くは山の外側にある。ここの西南は、側刀峯の西側と雷祖峯の東側の分岐点である。東に二里進み、側刀峯に上る。山頂と平行に二里進み、山頂を下り、甚だ狭い山の脊を渡る。赤帝峯の北を行き、一里の間、赤帝峯の東側をめぐると、分岐点である。そこで南を選択し、窪地の中を東に進み、一里で、天柱峯の東に出た。さらに南に下り、五里で、獅子山と大路とが合流するところを通過する。さらに分岐点から西へ進み福厳寺に入る［自注3］。明道の山房に宿泊する。

［自注1］南は茅坪への道である。

［自注2］東南は南天門に上る道である。
［自注3］寺の本殿は傾いている。僧の仏鼎が再建計画を検討していた。

［一月二十七日］

《概要》福厳寺から、衡山西部の形勝をめぐる記述。

■本文の部

二十七日

早聞雨、餐後行少止。由寺西循天柱南一里、又西上二里、越南分之脊、轉而北、循天柱西一里、上西來之脊、遂由脊上西南行、於是循華蓋之東矣。一里、轉華蓋南、西行三里、循華蓋西而北下。風雨大至、自是持蓋行。北過一小坪、復*1上嶺、共一里、轉而西行嶺脊上。連度三脊、或循嶺北、或循嶺南、共三里而復上嶺。於是直上二里、是爲觀音峯矣。由峯北樹中行三里、雨始止、而沈霾殊甚。又西南下一里、得觀音菴、始知路不迷。又下一里、爲羅漢臺。〔有路自北塢至者、即南溝來道。〕於是復南上二里、連度二脊、叢木亦盡、峯皆茅矣。既逾高頂、南下一里、得叢木一丘、是爲雲霧堂。中有老僧、號東窗、年九十八、猶能與客同拜起。時霧稍開、又南下一里半、得東來大路、遂轉西下、又一里半至澗、渡橋而西、即方廣寺。［寺正殿崇禎初被災、三佛俱雨中。］蓋大嶺之南、石廩峯分支西下、〔爲蓮花諸峯；〕大嶺之北、雲霧頂分支西下、〔爲泉室・天台諸峯。〕夾而成塢、寺在其中、［寺始于梁天監中。］水口西去、環鎖甚隘、亦勝地也。［宋晦庵・南軒諸蹟、俱没於火。］寺西有洗衲池、補衣石在澗旁。渡水口橋、即北上山、西北登一里半、又平行一里半、得天台寺。寺有僧全撰、名僧也。適他出、其徒中立以芽茶饋。〔蓋泉室峯又西起高頂、突爲天台峯。西垂一支、環轉而南、若大尾之掉、幾東接其南下之支。南面水僅成峽、内環一塢如玦、在高原之上、與方廣可稱上下二奇。〕返宿方廣慶禪・寧禪房。

先是、余欲由南溝趨羅漢臺至方廣；比登古龍池、乃東上側刀峯、誤出天柱東；及宿福嚴、適佛鼎師通道取木、遂復辟羅漢臺路。余乃得循之西行、且自天柱・華蓋・觀音・雲霧至大坳、皆衡山來脈之脊、得一覽無遺、實意中之事也。由南溝趨羅（漢）臺亦迂、不若逕登天台、然後南嶽之勝乃盡。

●校勘

＊1　「復」の下に底本では「過」があった。黄珅が乾隆本により削除したのに従い、削る。

■訳注の部

●訓訳

二十七日

早に雨を聞く。餐の後に行き、少しくして止む。

寺の西より、天柱に循ひて南に一里にして、又た西に上ること二里、南分の脊を越えて、轉じて北し、天柱に循ひて西に一里にして、西來の脊に上る。遂に脊上より西南に行く。

ここにおいて華蓋の東に循ふ。一里にして、華蓋の南に轉じ、西に行くこと三里、華蓋の西に循ひて北に下る。風雨大いに至り、是より蓋を持して行く。北のかた一小坪を過ぎ、

復た過ぎて嶺に上り、共に一里にして、轉じて西に嶺脊の上を行く。連りに三脊を度り、或いは嶺に循ひて北し、或いは嶺に循ひて南す。共に三里にして復た嶺に上る。ここにおいて直ちに上ること二里にして、是れ觀音峯たり。峯の北の樹中より行くこと三里にして、雨始めて止む。而して沈霾殊に甚し。又た西南に下ること一里にして、觀音菴を得。始めて路の迷はざるを知る。又た下ること一里にして、羅漢臺たり。路の北塢より至る者有り、即ち南溝より來る道なり。

ここにおいて復た南に上ること二里、連りに二脊を度る。叢木も亦た盡き、峯は皆な茅なり。既に高頂を踰え、南に下ること一里にして、叢木の一丘を得。是れ雲霧堂たり。中に老僧有り、東窗と號す、年は九十八にして、猶ほ能く客と同に拜起す。時に霧稍く開く。又た南に下ること一里半にして、東來の大路を得。遂に轉じて西に下り、又た一里半にして澗に至る。橋を渡りて西すれば、即ち方廣寺なり。[寺の正殿は崇禎の初めに被災す。三佛俱に雨中なり]。

蓋し大嶺の南は、石廩峯の分支の西に下りて、蓮花の諸峯となる。大嶺の北は、雲霧の頂よりの分支の西に下り、泉室・天台の諸峯となる。夾みて塢を成し、寺其の中に在り。寺は梁の天監中に始まる。水口西に去り、環鎖して甚だ隘く、亦た勝地なり。[宋の晦庵・南軒の諸蹟は、俱に火に没す。]

寺の西に洗衲池有り、補衣石澗の旁に在り。水口橋を渡れば、即ち北のかた山を山る。西北に登ること一里半、又た平行すること一里半にして、天台寺を得。寺に僧全撰なる有り、名僧なり。適々他出す、其の徒中立芽茶を以て饋す。

蓋し泉室峯は又た西に高頂を起こし、突して天台峯となる。西に垂るるの一支、環轉して南すること、大尾の掉するが若くして、幾んど東のかた其の南に下るの支に接す。南面の水は僅に峽を成し、内に一塢を環すること玦の如きもの、高原の上に在り。方廣と上下の二奇と稱すべし。返って方廣の慶禪・寧禪の房に宿す。

是より先、余南溝より羅漢臺に趨り方廣に至らんと欲す。古龍池に登る比ひ、乃ち東のかた側刀峯に上り、誤りて天柱東に出づ。福嚴に宿するに及び、適々佛鼎師道を通じて木を取らんとし、遂に復た羅漢臺の路を闢く。余乃ち之に循ひて西行するを得。且つ天柱・華蓋・觀音・雲霧より大坳に至る、皆な衡山來脈の脊にして、一覽して遺す無きを得。實に意中の事なり。南溝より羅漢臺に趨るも亦た迂にして、逕ちに天台に登るにしかず。然る後に南嶽の勝乃ち盡く。

●語注

○華蓋（峯）　「南嶽志」巻五形勝三七裏に「〔華蓋峯〕在嶽廟後、地産靈芝、一名靈芝峯」とある。「南岳市」図に見える。

○觀音峯　「南嶽志」巻五形勝四〇裏に「〔觀音峯〕在嶽廟右、下有羅漢臺金竹坪」とある。黄珅は、福厳寺の西北にあり、羅漢臺が峯の西麓にあると注す。「南岳市」図に見える。

○方廣寺　「南嶽志」巻一九寺観二八表に「〔方廣寺〕在蓮華峯下。梁天監中建。宋徽宗書『天下名山』四大字、懸佛殿。其後、朱張二子嘗遊此」とある。同巻一五釈一表に「〔惠海〕『一統志』惠海、方廣寺開山祖師也」とある。譚民政は、再建された伽藍を確認している（一〇三頁）。「南岳市」図に見える。

○三佛　黄珅は、正殿中の、釈迦牟尼・文殊・普賢三座仏像と注する。
○石廩峯　「大明一統志」巻六四衡州府山川に「〔石廩峯〕在衡山。形如倉廩・」とある。
○蓮花　「南嶽志」巻五形勝三八裏に「〔蓮華峯〕在嶽廟西、峯状如蓮華、其下即方廣」とある。
○雲霧頂　黄珅は、方廣寺の東北、天台峯の東にあると注す。
○泉室（峯）　黄珅は、雲霧頂の西、天台峯の東北にあって、三峯が連接していると注す。
○天台峯　黄珅は、方廣寺の西にある峯で、智顗が「楞厳経」を拝受したところで、拝經臺があると注す。「南岳市」図に見える。
○天監　梁武帝の年号（五〇二～五一九）。
○水口　水流の出口。ここでは塢から外へ流れ出ている川の出口。
○宋晦庵・南軒諸蹟　朱熹（一一三〇～一二〇〇）、字は元晦、号は晦庵等。張栻（一一三三～八〇）、字は敬夫等、号は南軒。いずれも南宋の思想家。このふたりは南嶽に赴いて連作の詩集を作っている。その経緯について後藤淳一氏の論文より引く。「乾道三年（一一六七）、朱子はその畏友張栻を長沙に訪れた後、朱子・張栻及び朱子の門人林用中との三人の間で次から次へと即興的に詩の酬答行い、『南嶽倡酬集』と題してその一連の過程作られた作品群を纏めた。」（後藤淳一「『南嶽倡酬集』成書攷」『中国詩文論叢』二四、二〇〇五年）。また「南嶽志」巻二一古蹟一四表に「〔嘉會堂　雪霽堂　萬玉堂〕『舊志』並在蓮華峯二賢祠内」とあり、ふたりをまつる「二賢祠」があった。
○洗衲池　「南嶽志」巻二一古蹟七裏に「〔梁惠海洗衲池〕『通志』在方廣寺半里許。有池、爲惠海洗衲處」とある。
○補衣石　「南嶽志」巻二一古蹟七裏に「〔梁惠海補衲臺〕『通志』「〔補衲臺〕在方廣寺右、梁惠海補衲處」とある。
○天台寺　「南嶽志」巻一九寺観五六表に「〔天台寺〕在天台峯。陳大建中、智顗禅師建」とある。譚民政は、天台寺遺址を確認している（一〇三頁）。
○芽茶　黄珅は嫩芽茶と注す。嫩芽は、草木のでたてのやわらかな若芽。
○古龍池　老龍池か。二十六日条。
○天柱（峯）　「大明一統志」巻六四衡州府山川に「〔天柱峯〕在衡山。形如双柱聳拔。」とある。
○佛鼎師通道取木　二十六日条に、福厳寺の正殿が傾いてきたので佛鼎師が再建を図っているとあった。ここにいう「木」は福厳寺再建のための木材であり、寺にそれを運び込むために道を開いたのであろう。

●口語訳

二十七日

《22》南岳西南部周遊

●福厳寺から方広寺まで

早朝、雨音を聞く。朝食ののち、出発すると、まもなく雨は止んだ。

福厳寺の西から、天柱峯にそって南に一里進み、また西に二里上り、天柱峯から南に分かれてくる山脊を越える。ここで北へ向きを変え、天柱峯に沿って西に一里進み、西から伸びてきている山脊に上る。そのまま山脊の上を西南に行く。

ここで華蓋峯の東面に沿って行く。一里で、華蓋峯の南面で向きを変え、西に行くこと三里で、華蓋峯の西面に沿って北に下る。風雨が大いに至ったので、ここからは傘を持って行く。北の方へ小さな平地を通過し、復た嶺に上り、あわせて一里で、転じて西に嶺の脊の上を進む。連続して三つの山脊を渡り、あるときは嶺にそって北に向かい、あるときは嶺にそって南に向かう。あわせて三里で再び嶺に上る。この場所からまっすぐ（南に）二里上ると観音峯である。（しかし観音峯には登らずに）観音峯の北側の樹林の中を三里行くと、雨がやっと止んだ。しかし、空気中にただよう靄が甚だしい。さらに西南に下ること一里で、観音菴に至る。ここで始めて道を間違ってはいなかったことが分かった。ここからさらに一里下ると、羅漢台である。北の山塢から伸びてきている道がある。これこそ南溝から来ている道である。

ここから、再び南に二里上る。連続して二つの山脊を渡る。あたりは叢木がなくなり、峯の上は草や茅で覆われている。高い頂きを越える、南に一里下ると、叢木が覆った丘が有る。ここに雲霧堂がある。老僧がいて、東窗と言った。年は九十八で、いまなお客人とともに拝起しているという。この時に霧はようやく消えた。さらに南に一里半下ると、東から来る大道に出た。そこでそのまま転じて西に下ること、一里半で谷川に至った。架かっている橋を渡り、西に向かえば、そこが方広寺である［自注1］。

●方広寺を取り巻く地形

思うに、大嶺の南側は、石廩峯の支脈が西に伸び下って、蓮花峯の諸峯となる。大嶺の北側は、雲霧頂より伸びた支脈が西に下り、泉室峯や天台峯の諸峯となる。このふたつの支脈が挟む形で窪地を形成し、方広寺はその窪地の中にある。この寺は梁の天監中の創建である。窪地から西に川が流れ去っているが、両側から閉ざすようにして山が迫っていてとても狭く、ここもまた形勝の地と言えよう［自注2］。

●天台寺へ

方広寺の西に洗衲池がある。補衣石が渓流の旁らにある。（窪地を出て）水口橋を渡り、すぐに北の方へ山を上る。西北に登ること一里半、さらに又た平行すること一里半で、天台寺である。この寺に全撰という僧侶がいる。名僧である。適々外出しており不在であった。その徒弟の中立というものが若芽のお茶でもてなしてくれた。

●天台寺を取り巻く地形

思うに、泉室峯はさらに西に伸びて高い頂を起こし、それが突出して天台峯となる。西に垂れた一支脈は、南の方へぐるりと回ることが、まるで大きな尾をふるったかのようであり、（泉室峯から）南下する支脈とほとんど接するばかりである。南に流れる川がわずかな渓谷を通過しており、内側に窪地を擁する玦のような地形が、高い平原の上にできている。下の方廣寺と上の天台寺とで、上下の二大奇勝と評価できるだろう。

引き返して方広寺の慶禪と寧禪の房に宿す。

●南岳西南部の総括

そもそも、私ははじめは南溝から羅漢台に行き、方広寺に至ろうと考えていた。ところが古龍池に登るあたりで、東の側刀峯に上ろうとして、道を間違え、天柱峯の東に出た。そこでそのまま福厳寺に宿泊することになったが、たまたま仏鼎和尚が木材を運搬するための道を通じようとして、あらたもに羅漢台へ至る道を開いた（のが分かった）。私はそこでこの道を通って西に行くことができた。

くわえて天柱峯・華蓋峯・観音峯・雲霧頂といった諸峯や大きな盆地に至るまで、すべてが衡山から派生した山脊であり、これらを全てあますところなく見ることができた。まことに願ったり叶ったりのことであった。南溝から羅漢台に行くのは迂遠でもあり、直接天台峯に登るのには及ばない。かくして南嶽の名勝は見尽くした。

［自注1］方広寺の正殿は、崇禎の初めに被災した。三仏はともに雨中にさらされている。

［自注2］宋代の朱熹と張栻に関わる遺跡があったが、すべて被災して消失している。

［一月二十八日］

《概要》方広寺から西へ進み、龍潭寺などを経て馬跡橋へ。ここで南岳衡山は終わりとなる。

■本文の部

二十八日

早起、風雨不收。寧禪・慶禪二僧固留、余強別之。慶禪送至補衲臺而別。遂沿澗西行、南北兩界、山俱茅禿。五里、始有石樹縈溪、崖影溪聲、上下交映。又二里、〔隔溪前山、有峽自東南來、與方廣水合流西去。〕北向登崖、崖下石樹愈密、澗在深壑、其中有黑・白・黄三龍潭、兩崖峭削、故路折而上、〔聞聲而已、不能見也。〕已而平行山半、共三里、過鵝公嘴、得龍潭寺。寺在天台西峯之下、南爲雙髻峯。蓋天台・雙髻夾而西來、以成龍潭之流；潭北上即爲寺、寺西爲獅子峯、尖削特立、天台以西之峯、至此而盡；其南隔溪即雙髻西峯、而蓮花以西之峯、亦至此而盡；過九龍、猶平行山半、五里、自獅子峯南繞其西、下山又五里、爲馬跡橋、而衡山西面之山始盡。〔橋東去龍潭十里、西去湘鄉界四十里、西北去白高三十里、南至衡陽界孟公坳五里。〕自馬跡橋南渡一澗、澗潤即方廣九龍水去白高者。〕即東南行、四里至田心。又越一小橋、一里、上一低坳、不知其爲界頭也。過坳又五里、有水自東北山間懸崖而下、其高數十仞、是爲小響水塘、蓋亦衡山之餘波也。又二里、有水自北山懸崖而下、是爲大響水塘。〔闊大過前崖、而水分兩級、轉下峽間、初見上級、後見下級、故覺其不及前崖飛流直下也。〕前即寧水橋、問水從何處、始知其南由唐夫沙河而下衡州草橋。蓋自馬跡南五里孟公坳分衡陽・衡山界處、其水北下者、即由白高下一殞江、南下者、即由沙河下草橋、是孟公坳不特兩縣分界、而實衡山西來過脈也。第其坳甚平、其西來山即不甚高、故不之覺耳。始悟衡山來脈非自南來、乃由此坳東峙雙髻、又東爲蓮花峯後山、又東起爲石廩峯、始分南北二支、南爲岣嶁白石諸峯、北爲雲霧・觀音以峙天柱。使不由西路、必謂岣嶁・白石乃其來脈矣。

由寧水橋飯而南、五里、過國清亭、逾一小嶺、爲穆家洞。其洞迴環圓整、〔水〕自東南繞至東北、〔乃石廩峯西南峽中水；〕山亦如之、而東附於衡山之西。逕洞二里、復南逾一嶺、一里、是爲陶朱下洞、其洞甚狹、水直西去。路又南入峽、二里、復逾一嶺、爲陶朱中洞、其水亦西去。又南二里、上一嶺、其坳甚隘、爲陶朱三洞、其洞較寛於前二洞、而不及穆洞之迴環也。二里、又逾一嶺、爲界江、其水由東南向西北去。界江之西爲大海嶺。溯水南行一里、上一坳、亦甚平、乃衡之脈又西度爲大海嶺者。其坳北之水、即西北下唐夫；其坳南之水、即東南下横口者也。逾坳共一里、爲傍塘、即隨水東南行。五里、爲黑山、又五

里、水口、兩山逼湊、水由其外破壁而入、路逾其上。一里、水始出峽、路亦就夷。又一里、是爲横口。傍塘・〔黒〕山之水南下、岣嶁之水西南來、至此而合。其地北望岣嶁・白石諸峯甚近、南去衡州尚五十里、遂止宿旅店。是日共行六十里。

■訳注の部

●訓訳

二十八日

早に起く。風雨收まらず。

寧禪・慶禪の二僧固く留むるも、余強ひて之に別る。慶禪送りて補衲臺に至りて別る。遂に澗に沿ひて西に行く。南北の兩界、山は俱に茅禿なり。五里にして、始めて石樹の溪を縈る有り。崖影と溪聲と、上下交々映ゆ。又た二里にして、溪を隔つるの前山に、峽の東南より來る有り、方廣の水と合流して西に去る。北に向ひて崖を登る。崖の下は石樹愈々密なり。澗は深壑に在りて、其の中に黒・白・黄の三龍潭有り。兩崖は峭削として、故路折れて上る。聲を聞くのみにして、見る能わざるなり。已にして山半を平行すること、共に三里、鵝公嘴を過ぎ、龍潭寺を得。

寺は天台西峯の下に在り。南は雙髻峯たり。蓋し天台・雙髻夾みて西に來り、以て龍潭の流れを成す。潭を北に上れば即ち寺たり。寺の西は獅子峯たり、尖削特立す。天台以西の峯は、此に至りて盡く。其の南のかた溪を隔つるは即ち雙髻の西峯なり。而して蓮花以西の峯は、亦た此に至りて盡く。

九龍を過ぎ、猶ほ山半に平行すること、五里、獅子峯の南より其の西を繞る。山を下ること又た五里にして、馬跡橋たり。衡山西面の山始めて盡く。橋は東のかた龍潭を去ること十里、西のかた湘鄕の界を去ること四十里、西北のかた白高を去ること三十里、南のかた衡陽の界の孟公坳を去ること五里なり。馬跡橋より南して一澗を渡る。澗は即ち方廣九龍の水の白高に去る者なり。

即ち東南に行き、四里にして田心に至る。又た一小橋を越え、一里にして、一低坳を上る。其の界頭たるを知らざるなり。坳を過ぐること又た五里にして、水の東北の山間の懸崖よりして下る有り。其の高さ數十仞なり。是れ小響水塘たり。蓋し亦た衡山の餘波なり。又た二里にして、水の北山の懸崖よりして下る有り。是れ大響水塘たり。闊大なること前崖に過ぐ。而して水は兩級に分かれ、轉じて峽間に下る。初めは上級を見、後に下級を見る。故に其の前崖の飛流直下するに及ばずと覺るなり。

前は即ち寧水橋なり。水の何れの處よりするか問ひ、始めて知る、其の南して唐夫沙河よりして衡州草橋に下るを。蓋し馬跡より南に五里の孟公坳は衡陽と衡山とを分かつの界處にして、其の水の北に下る者は、即ち白高よりして一殞江に下り、南に下る者は、即ち沙河よりして草橋に下る。是れ孟公坳は特だに兩縣の分界なるのみならずして、實に衡山西來の過脈なり。第だ其の坳は甚だ平らにして、其その西來の山は即ち甚だしくは高からず、故に之を覺らざるのみ。始めて悟る、衡山の來脈は南より來るに非ず、乃ち此の坳よりして東に雙髻に峙し、又た東して蓮花峯の後山となり、又た東に起ちて石廩峯となり、始めて南北の二支に分かる。南は岣嶁白石の諸峯となり、北は雲霧觀音となりて以て天柱と峙す。西路によらざらしめば、必ず岣嶁白石は乃ち其の來脈なりと謂（おも）はん。

寧水橋にて飯してより南す。五里にして、國清亭を過ぐ。一小嶺を逾ゆ。穆家洞たり。

其の洞は迴環圓整として、水の東南より繞りて東北に至る。乃ち石廩峯の西南の峽中の水なり。山も亦た之の如くして、東のかた衡山の西に附す。洞を逕（ゆ）くこと二里にして、復た南へ一嶺を逾ゆ。一里にして、是れ陶朱下洞たり。其の洞は甚だ狹く、水の直ちに西に去る。路は又た南して峽に入る。二里にして、復た一嶺を逾ゆ。陶朱中洞たり。其の水も亦た西に去る。又た南に二里にして、一嶺に上る。其の坳は甚だ隘なり。陶朱三洞たり。其の洞は較（やや）前二洞より寛なるも、穆洞の迴環なるには及ばざるなり。二里にして、又た一嶺を逾ゆ。界江たり。其の水は東南よりして西北に向かひて去る。界江の西は大海嶺たり。水を溯りて南に行くこと一里にして、一坳に上る。亦た甚だ平らかなり。乃ち衡の脈、又た西に度りて大海嶺となる者なり。其の坳の北の水は、即ち西北して唐夫に下る。其の坳の南の水は、即ち東南して横口に下る者なり。坳を逾して共に一里にして、傍塘たり。即ち水に隨ひて東南に行く。五里にして、黒山たり。又た五里にして、水口なり。兩山逼湊し、水は其の外より壁を破りて入る。路は其の上を逾ゆ。一里にして、水始めて峽を出で、路も亦た夷に就く。又た一里にして、是れ横口たり。傍塘・黒山の水は南に下り、岣嶁の水は西南に來り、此に至りて合す。其の地は北のかた岣嶁・白石諸峯を望むこと甚だ近く、南のかた衡州を去ること尚ほ五十里なり。遂に旅店に止宿す。是の日、共に行くこと六十里なり。

●語注

○茅禿　熟語はない。朱恵栄・黄珅は「つるつるに禿げていて、わずかに茅草が生えている」と訳す。

○三龍潭　黄珅は、黒沙潭・白沙潭・黄沙潭と注する。「南嶽志」巻五形勝九五裏に「〔黄沙潭〕〔白沙潭〕皆在蓮華峯澗水所注」とある。

○龍潭寺　「南嶽志」巻一九寺観六四表に「〔龍潭寺〕在黒沙潭」とある。「南嶽市」図に見える。

○雙髻峯　黄珅は、南嶽七十二峯のひとつと注す。

○獅子峯　黄珅は、別名、柿蒂峯と注す「南嶽市」図に見える。

○九龍　朱恵栄は「九龍坪」とする。「南嶽志」巻五形勝八一裏に「〔九龍坪〕在祝融峯後」とあり、南岳西部ではない。黄珅は「九龍渓」とする。不詳。

○馬跡橋　「南嶽志」巻五形勝九十九裏に「〔馬蹟橋〕距方廣寺三十里。北接衡陽界。昔朱張二子遊嶽、從此取道」とあり、ふたりの「過馬蹟橋詩」を載せる。「地名湖南」に記載がある。黄珅は、衡山西側の要衝と注す。「南嶽市」図にみえる。

○湘郷　明代は県で長沙府に属す。湘潭地級市湘郷市。県治自身は、馬迹橋の遙か北に位置する。

○孟公坳　黄珅は、衡山県と衡陽県の間にある山坳と注する。

○白高　黄珅は今の白果という。白果鎮は、馬迹橋から西北ではなく、北に位置する。

○田心　譚民政（一一〇頁）は今の「団山村」だろうという。

○一低坳　これが上述の孟公坳。

○界頭　今の界牌鎮だろう。「地名湖南」に界牌鎮の記事がある。孟公坳の中にあるのだと思われる。

○小響水塘、大響水塘　譚民政（一一二～一一六頁）は、それらしいところを特定したと

いう。
○唐夫沙河　沙江。蒸江の別名（二月一日条参照）。黄珅は「指蒸江、又作蒸水」と注し、源流を宝慶府（今の邵陽市）に求めて、（東流し、さらに南流して）衡州府城で湘江に合流すると注する。
○草橋　黄珅は「又名青草橋、韓橋。在衡陽城北。」と注す。
○一殞江　黄珅は「即一宿河、指涓水」と注す。涓水は白果市を経て北東に流れ、湘潭で湘江に合流する。「殞」は死ぬ、落ちる。「遊記」では「口」を「巛」に作るもソフトにないため、「口」で表記する。
○岣嶁　「大明一統志」巻六四衡州府山川に「〔岣嶁峯〕在府城北五十二里。高一千五百丈。」とあり、《湘中記》から「岣嶁山有玉牒。禹案其文、以治水。上有禹碑」を引き、韓愈の詩を載せる。黄珅は《山海経》からとして「衡山一名岣嶁」と引くが、現行本《山海経》には「岣嶁」の記事は無くい。「中山経」に「又東四十五里、曰衡山」とあり、郭璞の注に「今衡山在衡陽湘南県、南嶽也、俗謂之岣嶁山」とある。
○白石　「大明一統志」巻六四衡州府山川に「〔白石峯〕在府城北五十五里。山多白石」とある。
○國清亭　「南嶽市」図に「國清」が見え、寺院記号も載せる。黄珅は国清寺だといい、「今已廃」と注す。譚民政は、「現名国慶村」という（一一七頁）。
○穆家洞　黄珅は、以下の陶朱諸洞同様、洞穴ではなく、群山に囲まれて形成される山塢だと、注す。
○界江　大地図に見える。
○大海嶺　「南嶽市」図に大霞嶺が見える。あるいはこれか。
○横口　今の岣嶁か。「樟木市」図に神王山が見え、大地図には岣嶁に隣接して神皇の地名が見える。譚民政は神皇村を訪ねている（一一九頁）。
○傍塘　「南嶽市」図に伴塘が見える。あるいはこれか。譚民政は伴塘水庫の存在を確認している（一一八頁）。
○黒山　譚民政はここだとする山を紹介している（一一八頁）。

●口語訳

二十八日

《23》南岳西部を衡陽県へ

●方広寺から馬跡橋へ

早朝に起きる。風雨はおさまっていない。

寧禪・慶禪の二僧が固く留めたが、私は無理を言って出立し、彼らと別れることとする。慶禪が見送ってくれて、補衲台で別れた。

かくして渓流に沿って西に行く。渓流と小路を南北にはさむ両側の山はすべてうっすらと茅が生えている、のっぺりとしたはげ山である。五里進んで、始めて石崖に樹木が生い茂り、渓流に覆い被さっているところがあった。崖が水面に影を落とし、渓流の音がして、上下で交互に映えている。さらに又た二里で、渓流を隔てた前の山に、東南から峡谷（とそこを流れる渓流）が流れてくるところがあった。その水は方広寺からの水と合流して西に流れ去る。

北に向って崖を登る。崖の下は石崖と樹木とが愈々密になっている。澗水が深い壑を流れており、その中に黒・白・黄の三龍潭がある。両側の崖壁はそそり立っていて古い道が折れ曲がりながら上っている。（そこを上っていると）澗水の音だけが聞こえ、川面は見ることができない。山の中腹を平行に進むこと三里で、鵝公嘴を過ぎ、龍潭寺に至る。

龍潭寺は天台西峯の下にある。その南は双髻峯である。おもうに天台峯と双髻峯とが西から挟むように伸びていて、その間に龍潭の流れを形成している。龍潭を北に上れば、すぐに龍潭寺である。寺の西は獅子峯である、切り立ってとがって直立している。天台以西の峯は、ここで尽きている。そこから渓流を南に隔てているのは双髻峯の西峯である。蓮花峯以西の峯も、ここで尽きている。

九龍を過ぎ、山の中腹あたりを平行に進むこと五里で、獅子峯の南からその西を繞る。山を下ることさらに五里で、馬跡橋である。衡山の西面の山はここで全く尽きる。橋は東の方は龍潭寺から十里、西の方は湘郷の境界から四十里、西北のかた白高から三十里、南のかた衡陽の界の孟公坳から五里である。

●衡山西側を南下、衡山衡陽県境の界頭へ】

馬跡橋から南に澗水を渡る。この澗は、方広寺・九龍から白高に流れるものである。

すぐさま東南に行き、四里で田心に至る。さらにひとつの小橋を越え、一里すすんで、ひとつの小さな山坳（孟公坳）を上る。ここが界頭であるのに気づかなかった。坳を通過してさらに五里で、東北方向の山間の懸崖から下ってくる水（瀑布）があった。その高さは数十仞あった。これが小響水塘である。思うに、これもまた衡山から伸びている余波であろう。さらに二里で、北の山の懸崖からくだってくる水があった。これが大響水塘である。前の崖に懸かっていた小響水塘より規模が大きい。こちらの瀑布は二段に分かれており、転じて峡谷の間に流れ落ちている。まず上段の流れだけが見え、その後で下段の流れが見える。だからはじめは、真っ直ぐに流れ落ちている小響水塘よりも規模が小さいと誤解をしていた（上下段の流れを見て、こちらの方が規模が大きいことが分かった。）

すぐ前が、寧水橋である。その水がどこから来るのかと質問したことから、南に流れて唐夫沙河を経て衡州の草橋に下るのであることが分かった。

●南岳衡山の地脈の考察

思うに馬跡橋より南に五里にある孟公坳は、衡陽県と衡山県とを分かつの境界に位置するが、ここから北に下る川は、そのまま白高（白果鎮）を経由して一殞江に下る。南に下る川は、そのまま沙河を経て草橋に下る。つまり孟公坳は、ただ両県の境界をなすのみではなく、まことに衡山から西に伸びてきた脈なのである。ただこの山坳は甚だ平らかなので、西来の山も甚だしくは高くない。だからそれが脈であることが分からなかったのである。

それがここへ来て始めて分かったのである。衡山からの山脈は南から来るのではなく、とりもなおさずこの山坳から発している。東では双髻として聳え、さらに東に伸びて蓮花峯の後山となり、さらにまた東に起ちて石廩峯となり、そこで始めて南北の二支に分かれる。南への支脈は岣嶁・白石の諸峯となり、北への支脈は雲霧・観音となってさらに天柱峯と対峙している。

衡山の西側の経路によらなかったならば、おそらく岣嶁峯や白石峯は、衡山から直接延伸してきた山脈だと勘違いをしていただろう。

［湖広衡州府衡陽県域］

●衡陽県を南下：国清亭、界江を経て、横口へ

寧水橋で昼食を取り、そこから南下する。五里で、国清亭を過ぎる。一小嶺を越えると、穆家洞である。

この洞は（洞穴ではなく）、周囲を山がぐるりと廻り円形をなしいる場所である。川が東南からめぐってきて東北へ至っている。これが石廩峯の西南の峡中から流れ出ている川である。山筋も同様で東南からめぐって東北へ至っており、東の方は。衡山の西部につながっている。

洞内を二里進み、再び南へ一嶺を越える。さらに一里進むと、陶朱下洞である。この洞は甚だ狭く、川が真っ直ぐに西に流れ去っている。道筋は南に向かって峡谷に入る。

二里進み、再び一嶺を越えると、陶朱中洞である。ここでも川が西に流れ去っている。さらに又た南に二里進み、一嶺を上る。この山坳はとても狭い。陶朱三洞であるこの洞は前の二洞よりもやや広いが、穆洞が周りをぐるりと山々に囲まれていて広々としているのには及ばない。

二里進み、さらに又た一嶺を越えると、界江である。ここでは川が東南から西北に向かって流れ去る。界江の西は大海嶺である。川を溯って南に一里行き、一山坳を上る。これもとても平かである。つまり衡山の山脈は、西に渡ってきて大海嶺となったのである。この山坳の北面の川は、ただちに西北に流れて唐夫まで下る。南面の川は、ただちに東南に流れて横口に下る。

山坳を越え、あわせて一里で、傍塘である。ここから川に沿って東南に行く。五里で、黒山である。さらに又た五里で、水口である。ここでは川の両側から山が迫ってきていて、その山の壁を破るようにして川が流れ込んでいる。路筋はその川の上を越えて行く。一里で、川ははじめて峡谷から外へ出て、路も平坦になった。さらに又た一里で、横口である。傍塘・黒山と流れて来た川は南に下り、岣嶁峯からの川は西南へ流れてきて、この地で合流する。この地から北のかた岣嶁・白石諸峯を望むととても近くに見える。

南のかた衡州まではなお五十里である。遂に旅店に止宿する。この日進んだ行程は六十里であった。

■補足：「遊衡山日記」のまとめ

衡山探索は、まず東南麓の南岳太廟及びその周辺の祝聖寺等寺観・廟や洞を見学し、西北に上って、半山庵・南天門を経て山頂に至るのが主なルートで、山頂及びその周辺の上封寺・祝融峯・會仙橋などの探索がメイン。多くはここまでで引き返す。薄井が二〇〇八年に訪問した際も、このメニューであった。

徐霞客の場合は、登山の前に山麓の水簾洞と九真洞を探索しているが、南岳太廟や周辺の寺観についてはほとんど言及がない。山頂へ至る間の記述もごく簡略で、祝融峯山頂における遊行については全く記事がない。意図したものか、あるいはたまたまこの部分が脱落したのかは分からないが、南嶽に関して多くの遊記などで言及されている名勝や寺観などについては、徐霞客游記は全くと言ってよいほど触れていない。

しかし、あまり人が訪れない南嶽の西部地域については、この二十六日条を中心に、十分に探索して詳細な記事を残している。そして従来の理解とは異なる南岳衡山の地脈を見

いだしており、「南嶽之勝乃盡」と記述を締めくくっている。多くの人々によって語り尽くされている観があるメインルートはほとんど触れず、あまり注目されない西部地域について詳述する姿勢には、徐霞客のこだわりがあるのかもしれない。ただし、あまり人が訪れないとはいっても、道は整備されており、一月一五日の雲陽山のような道なき道を行くという苦労はなかったようである。

（第三部へ続く）

訳注：薄井俊二、二〇二五年二月二十五日